



Fore Please /
世界ゴルフ

識聞録

ゴルフビジネスのプロが30年以上回って見て聞いて感じた世界のゴルフ文化をお伝えする当連載。第14回は日本人選手の米挑戦のお話です。

豪州と日本の 共通したツアー状況。

オーストラリアのゴルフ、と言え、最近ではアダム・スコットやジェイソン・デイなどのトッププレーヤーが世界で活躍しています。全英オープン優勝やマスターズでの上位入賞など、オーストラリアの名前を世界のゴルフファンに最初に知らしめた現在85歳の「Mr.ゴルフ」ピーター・トムソンは、日本の大会でも功績を残しましたね。トムソン以降も、グレッグ・ノーマンやイアン・ペーカー、フィンチなど70年代から80年代にかけてオーストラリア勢が存在感を放っていました。

昨年10月のアジア・パシフィック・ゴルフ選手権にて、ペーカー・フィンチとゆっくり話す機会がありました。彼は1979年に19歳でプロ転向しましたが、当時からオーストラリアではアマチュアのトッププレーヤーは強豪揃いで、5歳上のノーマンにも影響を受け、アマチュアではなくプロの道を選んだそうです。ペーカー・フィンチと言え、1991年の全英オープンで当時3歳だった娘さんと一緒に優勝インタビューを受けていましたが、お嬢さんが向けられたマイクをアイスクリームと思ったのでしょうか、スポンジのカバーに噛み付いたシーンを思い出します。その映像はイギリスBBCの年末のスポーツハプニング映像のトップとして何度も紹介されていました。……おっと、話が逸れまし

た。

日本でも活躍したペーカー・フィンチとの懇談で話題に上ったのは海外に挑戦している日本人選手たちの事でした。プロゴルファーにとって、オーストラリアと日本はよく似た環境のようです。国内のツアーがありつつもトッププレーヤーたちは更に上を目指してアメリカのPGAツアーやヨーロッパツアーに活躍の場を求めますが、日本もオーストラリア同様に世界で活躍する選手が10年周期ぐらいで出ているとの持論でした。

ゴルフに興味を持つ子どもが増えることが理想。

ピーター・トムソンと同時期の60年代の河野高明に始まり、70年代後半からの青木功、尾崎将司、80年代では中嶋常幸、倉本昌弘、2000年代になると丸山茂樹、少し後に片山晋吾、今田竜二など、重複している期間も多少ありますが、世界で認められる選手はおよそ10年のサイクルで生まれると言われる事にも納得します。

日本の選手が海外ツアーに本格的に参戦するとなると、まとまった資金が必要で、国内のツアーやスポンサーとの関係など様々なハードルがあります。オーストラリアのように英語圏ではないので、言葉のハンデも大きく、この10年サイクルの陰には日の目を見なかった幾多の挑戦があったはず。ペーカー・フィンチは現在アメ

Vol.14

ペーカー・フィンチの
自論

10年サイクルで 米挑戦する 日本人選手たち



リカのメジャーネットワークでの解説も務めています。この10年サイクルでも2010年からの期間に挑戦している石川遼や松山英樹のような選手はある意味今までの日本人のチャレンジャーとは異なり、計り知れない可能性があるとのコメントでした。彼らがメジャーチャンピオンになる可能性に関しては、「難しいだろうが上位争いに絡む実力を持っているし、伸びるであろう」との事。幼い頃からテレビのマスターズを見て憧れていた石川が実際にオーガスタでプレーをしているように、昔に比べて世界は手の届く場所まで来ているのです。

20代の日本人選手の活躍を見て、10代のジュニアゴルファーがその背中を追うだけでなく、ゴルフに興味を持つてくれる子供自体が増える事を願う所です。2020年のオリンピックで活躍する選手たちはひよつとしたら現在10代後半の選手達かもしれません。日本ゴルフ界の将来の為に今年の松山、石川両プロの活躍に期待したいですね。

ゴルフビジネスの プロフェッショナル



神野方仁 (じんの・みちひと)
1956年生まれ。テレ・プランニング・インターナショナル株式会社代表取締役社長。国内外の様々なスポーツビジネスに関わり、中でもゴルフはマスターズのようなメ

ジャー大会からジュニアゴルフに至るまで、イベント、放送、広告、マーケティングなどの面に長年携わっている。日記を公開中 Fast Track Michi's Diary: www.tpi-j.co.jp/diary/index.html

イラスト/ソリマチアキラ